慈光

第二十八巻　第七号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十一年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通三二五号）

目次

思想解決の要鍵……近角常観……(1)
慈光のあと(一)……福島政雄……(7)
仏かねてしろしめして(一)……榊原徳草……(12)
念仏詩抄……木村無相……(17)
如来は最上の知己……花田正夫……(20)

思想解決の要鍵

近角常観

今日（大正六年九月）の種々の思想問題が起っているのを徹底して解決すべき要鍵は何であるかについてお話してみようと思うのであります。この題を信者の人々にもよくわかるようにいうならば、信心を決定することはなかなかむつかしいが、如何にして信仰に入られるかという問題であります。

思想解決の方法として大体に二つに分れている。一は一定の規則をもって、ああせよ、こうせよというように、それによりて行わせて行こうという方法である。しかし私共の心はそう教えられてもなかなかその通りに行われるものではない。故に、も一は思うままに、気の向くままにやって行こうというようになる。今日一般の傾向を見るに、いずこも自由におもわく通りにやろうという風が多い。故に一定に切り揃えるやりかたでは、なかなか人々は云うことを聞いてはくれない。さればとて気侭にやってゆくのではほんとうのことにはならぬ。そこでどうしたらよいかを考えねばならぬのであります。

これには法然上人と親鸞聖人との関係を見るのが最もよい。親鸞聖人は、法然上人が「念仏をとなえよ、南無阿弥陀仏一つだ」と仰せられたのを、そのままありがたく信ぜられたのである。法然上人が「念仏を称えよ」と仰せられたのを聞いて「称えよと仰せられたから称えるのだ」と言葉通りに従がい、云われた通りにされたのが三百八十余人の他の御弟子達である。即ち法然上人が戒律をたもっていられるから自分もたもつのだと、法然上人を手本とし尺度として行われたのであった。故に形は法然上人と同じであっても、直に上人の思召を頂かれたのではない。

今日、思想問題においても規則通りに行わんとしてもなかなか出来るものではなく、よしや出来ても所謂杓子定規になり易い。他力本願の教を聞いても、言葉通りに聞いてその通りにやろうとしてもなかなか出来ぬ。そんなことをするのではない。それかといって勝手にするのではない。

親鸞聖人は法然上人に似よりもせぬ事をされた。法然上人は清僧で念仏をすすめられたのに、親鸞聖人は肉食妻帯

で信心をすすめられた。まるで正反対のようだと思う人もあるが、私共の考えは自分のおもわく通りにやるのでは安心はつかぬ。法然、親鸞両聖の関係はおきて通りに従われた親鸞聖人でもなく、さればとて勝手気ままにされたのでもない。何をきかれたかというと、法然上人の教化は、彌陀如来の選択本願は罪深く障り多き、あさましき私に、如来は大慈大悲のみこころをもって、そのものをやるせなく仰せられる御真実の深きものであるから、心まかせにしては何処までも勝手気侭に流れる私なれども、こういう私を憐れみましまして、そのものを何処々々までもやるせなく仰せられるご真実を聞いて、このご真実に頭を下げて、真に心から信順するというのが、法然上人の仰せをきかれた親鸞聖人の態度であります。

故に今日の思想問題も杓子定規で解決されるものでもなく、気侭放縦で解決されるものでもなく、私共に如来のご真実のまことを聞かせてもらうことによりて、はじめて心から信順することが出来るのであります。この真実の心から信順する処の信仰心一つあれば、それで私共の人生の思想問題の解決が出来る、これが要鍵であります。信仰の問題を実際上の思想問題に応用さえすれば正しく解決されるのであります。

今日お集りの人々には題があまり適切でないようであるけれども、私共の心の問題がすべて思想の問題であるからこれを深く私共の心の中に頂けばよいのであります。歎異抄の第十六章はこの問題の解決である。即ち

「信心の行者自然に腹をもたて、あしざまなることをもおかし、同朋同侶にもあいて、口論をもしては、かならず廻心すべしということ、この條断悪修善のここちか」

「私共が喧嘩口論をするのは自然にやることだから仕方がないのだ」という一方の論者に対して「それはいけない一々廻心懺悔して悪かったと心をとり直してよくせねばならぬ」という論者がある。前のは気侭のままに通す人で、後のは捉の通りやかましくいう人である。これはどちらも真の生活ではない。ここに一つの真実の道がある、それは何であるか。全体そのたびごとに廻心せよというのは、悪を断じて善を修める心であろうが、これは私共の力ではとても出来ることではないのであります。

「一向専修の人においては廻心ということただひとたびあるべし。その廻心とは日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらすをこそ、廻心とは申しそうらえ」

悪心をよくせよ、ああせよ、こうせよというのは、自分

の力で氷をとかしてしまい、自分で善に向おうとつとめるのである。又一方の自然だというのは氷は氷で仕方がない悪いのは悪いでやむを得えないのだと打ちすててておくのである。これでは安心は出来ないのであります。ひややかな氷は自分の力では溶かすことは出来ないけれども、温かい日光に照されてみれば、いかに冷やかな氷でも、春の光りでどこどこまでも溶かしてしまうという光りがあらわれた時には、いかに冷やかな氷も遂に溶けて温かい水になる。他力の味いはこれであります。私共の心は冷やかな浅ましききたないものであるけれどもそれを照らす如来の光りのために解けずに居られぬというのが廻心という事である。

信心のお話は聞きようによっては少しも聞えない。自分でありがたいと思ったのが信心というならば、自分の力で氷が溶かされると思うのである。私共は冷やかな心で、とても喜ぶことは出来ない。他人をこそ冷やせ、温かくする事は出来ない。故に私共の心の上に温かなありがたい心が起るのだと思うならば、それはあやまりである。故にこのたびは　今日までありがたがるのだ、あたたかになるのだと思ったのはあやまりだったと解ったとしたところが、それだけで信心だというのではない。

信心とは自分で温かくなるのでもなく、冷やかなままに打捨てておくのでもなく、そういう冷やかな私に、つめたい私に、人をこそ冷やせ、温かくする事の出来ない私のこの心に、どこどこまでも温かな心で向って下さる人があればそれで私共はたすかるのであるが、しかしそのような人は人間にはない。ないからこまるのであります。人間の中にそんな人のある筈はない。いかに親切な人もほんとの頼みにはならない。自分が人に親切にするにしても、ほんとうにはそれが出来ていない。してみれば自分で喜び、自分で温かくなる事は出来ないけれども、私共のかかる有様を洞察し、あわれみ、同情して、よしんば私共がいかに冷やかな心にて、あたたかなお慈悲の光りに向っても、きわまりのない光りのためには、遂には冷やかな氷も溶かされてしまうのである。「ひごろ本願他力真宗をしらざる人」とは、こういう仏が居て下さるとの事を知らなかった人のことであります。「弥陀の智慧をたまわりて」とは、こういう御真実を聞かせて貰うた一念が、智慧をたまわる一念である。「ひごろの心」とあるのは、今までは自分で温かになって安心するのだとか、このまま打捨てておくのだとか思っていた心をいうのである。私共の心はみなこの二つでいつまでたってもこれでは安心は出来ない。この安心のならぬ私共の苦しい心根を察しあわれみて、やるせなく思召す大慈大悲のご真実一つで救われるのであります。

私共が、ああせねばならぬ、こうせねばならぬと廻心し

ようと思ってする廻心は真の廻心ではない。自然の侭にまかすというのも本当ではない。如来がそういう私を憐れんで下さる御真実を聞かせて貰った一念に、私の冷やかなだけそれを同情し、悪しきだけそれだけ憐みて、どこどこまでも見捨てぬとの御真実が到り届いた処が一念であります言葉でいえば易いけれども、逃げてそれが頂けない。例えば息子が病気すれば親としてはどうかして子を助けたいと思うし、子は親にすがりたいし、本復したい、させたいというのが人情である。故にあたりまえの人情では子は親のため、親は子のために死んでも死ねぬとまでに思うて身を大切にし苦労する。これほどの思いでやっても、助からぬものはどうしても助からぬ。このどうする事も出来ぬ処が所謂氷である。人間の力でこれがやれるのならば氷ではないけれども、親としては子を助ける事も出来ず、子としてはよくなる事も出来ぬ、ここが氷である、いよいよどうにもならぬ。これだから如来様ばかりだというのでは氷で冷やかだというだけで、それでは安心がついたのではない。仕方がなくなったからとて仏につきやったのではまだ安心は出来ない。親の力でも子の力でも、人間の力にては及ばぬとの、この悲しさ苦しさを察して、さぞ苦しいだろう、淋しいだろうと、これをどこどこまでも憐み同情して見捨てぬとの大慈大悲の広大なるご真実だというので始めて氷が溶けてしまうのであります。

私共は親にああせねばならぬ、こうせねばならぬと律法的にやりたいと思うけれども、それが出来やしない。私共には出来ぬけれども、親の真実は見捨てずに、何処々までもれぬという呆のである。非常に気侭な仕方のない私を親はそれ程にやるせなく仰せられるという御真実、これで安んずるのである。これは仏のまことを親に譬えたのであります。間人の力ではどうする事も出来ないというのが氷である。この氷を何処までも溶かさねばおかないというのが春の日光である、如来の慈悲の光りであります。

私は世間の思想について色々の訴えをきくのであります中には自分の力で人々に優しくし人々を救うというように自分の方でよくするのだという事で誤りが出来ている。人に優しくする事が信仰の行いだと思って、人にしたことがかえってためにならぬ。自分に出来ない事を企てていたので、自分が氷である事を気付かずに、自分が仏様のような者だと思っているのであります。私にしても初めは、自分はよいと思ってやっているのに、向うがよくない、冷やかだとのみ思っていた。然しこういう事をいうのがすでに自分が冷やかなのだと気がついた。即ち自分は金剛石だけれども向うの石や瓦で傷つけに来るから、自分に傷がつき砕けたというのならば、自分はすでに金剛石ではない、偽物

だったのであります。ここに気付いてからは、これではつまらぬ、いけないと自分を悲しんで、善くしようとしてもよくはならぬ。こうなるとそういう氷の塊りなる自分に対して、自分の冷やかな事に同情して、どこどこまでも融かさねばおかぬという広大なる御真実に逢えば、そこに初めて融けるのであります。このご真実で融けるというのを、私共の心で融けると思っていたのが誤りのもとであったのであります。自分の力では、どうする事も出来はしない、氷は氷の力ではとけない。又このご真実を人間同志の中に求めていたけれども、人間の中にはそれは決してありはしない。この広大な恵みは仏より外はないのである。

信心の話を聞いて温かく感ずるのを、自分の心だと思ったり、又は自分が冷やかだ、人が冷やかだと歎き不足をいうのも、これは自分の力でそうするのではなし、人生はそれほどに冷やかな思いのままにならぬ頼み少いということを、どこどこまでもやるせなく思召すのが如来のご真実、恵みひかりであります。不平や不満のあらん限り、どこどこまでも憐れみ給うご真実であるから、あくまで如来の方がまけない、私の冷やかな心と、如来のまことと、いずれが勝つかという事によって信仰が徹するか否かという事がきまるのであります。

「一切のことにあしたゆうべに廻心して往生をとげ候うべくば、人の命は出ずる息、入るを待たずして終ることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもいに住せざらんさきに、いのちつきば摂取不捨の誓願は空しくならせおわしますべきにや。」

普通の人々の考えでは。如来のご真実はあり難い、然しこんなにあさましくてはいけない、冷たくてはいけないと思う。故に

「口には願力を頼み奉るといいて、こころにはさこそ悪人を助けんという願不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ助けたまわんずれと思うほどに、願力を疑い、他力を頼みまいらす心かけて、辺地の生をうけんこと、もとも歎き思いたまうべきことなり。」

こういうように安心が出来ないとなるのであります。昨日もある人が「どうも私は信心が得られません」と苦しんでいる人がありました。私が云うには「信心を得たいと思っても得られない。得られないから心淋しい。この心を察して、無理のない事だと真に見て下さるのが如来のご真実である」と話した事であります。いよいよとなればどうする事も出来ない、この悩み、苦しみをどこどこまでも察して下さる広大なるご真実である。が、それでもよくしたい、病気をなおしたいと自分の思いの方をたてれば如来のお慈悲は聞えない。然しどうしようと思ってもどうにもならぬ処をなお更らあわれみ給うのだというご真実を聞いた時に、かくまで広大なるご真実かと聞く一念に、初めて如来のお慈悲の光りに氷がとけたので、これが信心決定であります。私共の及ばぬ処をかくまでに仰せらるるご真実に安心して、どうなろうとも、如来のご真実に打ちまかせて、それに信順する事によって衷心から有難うとなるのである親鸞聖人が法然上人の仰せを聞かれたのがこれであります

「親鸞におきては、唯念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに浄土に生るるたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候わばこそすかされたてまつりてという後悔も候わめ。いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

歎異抄第二章のこの言葉が聖人が如来の恵み、法然上人の仰せに信順せられたのであります。

最後に仏の心とは親の心である。親心とは親が私共の病気を見て、他の食物がたべられぬからとて特に粥をこしらえ、他の衣服が着られぬからとて手織りの衣服をこしらへて下さった。親の与えられたる真実のまごころが粥となり手織りとなった。然るに子の方では、健康だから固い食物もたべられる、よい衣服も着られると思っているから、親の真実がなかなかわからない。強いて親の言葉のままに従うとすると、親がすすめるから食べなければならぬ、着なければならぬと思ってするので、心の底から親の思召がありがたくてするのではない。世の中に教は多いけれどもこうせねばならぬ、ああせねばならぬというのではそれが出来ない。その場句は勝手にやって行くというようになって、勝手にたべ、勝手に着るというのでは安心は出来ないけれども、いよいよ親のそういわれるわけを聞けば、他の物が食べられたり、着られたりするならば、粥も手織もこしらえはせぬが、お前はそれが出来ぬからお前一人のためにどうかして食べさせたい、着せたいと思って用意したのだと、親の真実をきかされた時には、それ程までに仰せられる親のご真実が頂かれた時に初めて喜んで粥をたべ、手織を着られるのであります。自分をかほどまでに思召すかと心の底に徹した処が信心である、決定である。ありがとうと心から広大の仰せに信順し心服する処が即ち思想解決の要鍵であります。

『法蔵』三百十五号より

慈光のあと（一）

福島政雄

一

それは私の二十六歳の夏六月のことであった。東海道線の下り列車の窓に身をおいた私は美しい富士のすがたに眺め入っていた。残雪をいただいた富士はその日はじめて私に澄みわたった美しいすがたを見せた。富士の峯がそれほどに美しいものであるとは私はそのときはじめて知ったのであった。私はしみ〴〵とその頂上のあたりを打仰いだ。

併しその美しい景色を眺むる私の胸には真実のなぐさめはなかった。私の心は悩みの雲にとざされていた。青春期の末期を吹きあれた胸のあらしは私の心に重苦しい灰色の雲を吹きあつめていた。人生は既に淋しみの極であった。青春期のはじめから中頃にかけて人を罵り世を憤った私は、その気力さえも失ってしまっていた。そして私が理想を高く我が胸は清いと自ら許していた過去数年の自己をふりかえってはただ涙を催すばかりであった。

おもえば私の過去の理想は美しかった。あの富士のねの美しきがごとくに美しかった。我が将来を教育という世界に望見していた私は、そこにさま〴〵の美しいものを描いて居た。愛ということは私の旗幟として高くかかげられてあった。幼少の頃から厳格な儒教的の家庭に育ち、中学時代を鍛練主義の学校に生い立った私には、その愛ということも恋愛のようなものではないつもりであった。それはペスタロッチーの一生を貫くような美しい愛のつもりであった。高等学校から大学の学生時代にかけて、或はキリストの山上の垂訓に泣き、或は梁川の美しき悩みの文に酔い、或る時はトルストイの晩年の思想にあこがれ、又は樗牛に導かれて日蓮上人の精神に感じ、かくして大学を卒業しようとする頃の私ははじめてペスタロッチーの世界をうかがいたいという考をほのかに起こすと共に、和訳法華経を三度も繰りかえして、そこに大なる信念をつかみ得たとおもったのであった。

忘れもせぬ明治四十五年七月十日銀杏の緑の葉かげ美しい大学正門内の並樹の下に、うれしき胸も躍るばかりに行

幸を迎え奉り、その後図書館に設けられた卒業式の場に、我れこそは確たる信念をつかんで最も意義ある卒業をする身であるとおもいあがっていたのは昨日のことのようであるのに。又はその後半年にして実際教育の片はしにたずさわるようになり。春の日の暖かなる頃を教え子の愛らしさに心も酔わんばかりになって、一時間一時間の授業は、悉く成功の感を以て終ったことも昨日のことのようであるのに。

何事ぞ、その後僅かに一年あまりの間の我が心の転倒は。教育の楽しさは去り心の淋しさは湧き起こり世の人は冷たく、教育にたずさわる人々の心は取りわけて冷たく、我れひとり温かなる心を以て教育の野に立ってもこれを理解する人もなく、教え子は我れ笛吹けども躍らず、我れはただひとり淋しき胸を懐いて教育の道を孤行する人となったのであった。

人の世の深き淋しさを味わい初めて既に十ケ月、灰色の雲は私の頭をも胸をもおおいつくした。「灰色の気分」という新しき人々の新しき言葉は私の心持を言いあらわすに最もふさわしかった。私の心は次第に気ちがいじみて来た。夜もよくねむることが出来なかった。法華経によって何か確固たる信念をつかんだと思っていたことは実は夢のようなものであった。それはこの孤独の苦しみと淋しみとの中においては、私にとって何の力にもならなかった。私はただ慰めを人に求めた。併し人はもはや私の慰めにはならなかった。教え子がなつかしそうに、「先生！」とよんで近づいてくるのを見ると、私の心にはかえってすまぬという感が起った。

三ケ月程前から私は近角常観師の御話をきいて居た。はじめて御話をきいたのは大正三年三月の末の或る日曜日であった。御話の題目は「世間虚仮唯仏是真」ということであった。その三時間あまりの御話を私は胸に針をさされるような感じできいて居た。過去一年間の私の心の生活がかえりみられた。私は自分は温かい心を持っていると考えていたことが虚仮であったと気がついた。世間の虚仮なるは我が心の根本が虚仮であるが為である。私は世間虚仮ということをしみ〴〵と感じた。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごとたわごと、まことあることなし。」私はいつしか自己の魂に哭く身となった。

魂の問題に哭くこと既に三ケ月、灰色の雲につつまるる魂をいだいていた私は、今東海道線の汽車の窓に美しき富士の峯を仰いだのであった。而して人に慰めを得なかった私は自然にも慰めを得ることが出来ないのであった。嘗てはオーズオースの自然をうたった美しい歌に酔って自然

を讃美した私の心も今は全くかわり果てていた。自然も亦無常流転のものである。此の美しい富士の峯もいつしかうつり行くときが来る。それをおもえば私にはもうすべてが夢幻であった。

夢幻の宇宙人生を悲しむ私をのせて東海道線の汽車は西へ西へと走った。

二

郷里熊本で私は徴兵検査を受けた結果は第二乙で補充兵に編入された。而してやがて又東京へむかって出立しようとしていた時、私はあらためて両親の前によび出された。

両親があらたまって私にもち出したのは結婚問題であった。結婚の相手ということについて私がどんな考を持っているかをたずねたのであった。併しその両親のたずねに対して私は素直に私の胸の中を打ちあけることが出来なかった。気ちがいじみていた私の胸の中にはむらむらと両親に対する反感が起った。此の私の胸の若い思いが両親にわかるものかとおもった。それでとりとめた答もしなかった。そしてそのまま東京へ旅立ったのであった。

東京へかえってからの懊悩は更につづいた。その懊悩の心を打明ける友も私にはなかった。私はひとりでなやみつづけた。灰色の雲は更に濃くなった。人生は私には灰色の曠野となった。その曠野のなかをとぼ〳〵と歩んで行く自己のすがたはこの上もなく淋しいものであった。それでも私はまだ自分が絶対絶命になっているとは考えなかった。近角師の懺悔録をよんで、師が煩悶の当時には一室の中をきり〳〵と足つま立ててまわって居られたことを読み、自分は煩悶はしていてもまだそれほどまでも行きつまっていないと考えていた。私の心はまだ生ぬるかった。生ぬるい煮えきらぬ心は果てしもなくつづくようであった。

私はなやみながらも姑息偷安（こそくとうあん）の一日一日を送った。胸の中には氷の塊のような苦しみが五つも六つもつかえているのに、まだ奈落の底にはおち込んでいないつもりであった。

暑苦しい六月の末の日が私の気分をなお更に重苦しくした。

三

近角常観師の求道学舎における夏期求道会が、その七月の五日からはじまった。私は隙を見出しては数回それをききに行った。

題は「人生問題と信仰」、講本は教行信証、信の巻の中の阿闍世王入信文であった。その御話をきいて行くうちに私の胸の中には不思議の変化が起った。苦しみの塊のような氷塊が五つも六つもあったとおもった私の胸の中がいつしか次第々々に軽くなった。御話はしみ〳〵と私の苦しみ

の胸にひびいた。阿闍世王の煩悶と求道とがよそ事ならず私の心にひびいた。

七月の十一日となった。その日の夕方私は九州の方へかえる一人の友を新橋駅に見送って、日が暮れてから私の下宿の方へかえって行った。私の下宿はその頃代々木の十三間道路のほとりにあった。私は代々木の停車場で電車を下りて、美しい星空の下を歩んで、今の明治神宮の後の方、その頃の代々木の御料地の北に沿うた道路を西に向って歩いて行った。その時である。私は私の心持が根本から転換したということを感じはじめた。

すべての苦しみの氷塊は私の胸の中から融け去っていた。しみ〳〵と深い心持が私の胸にみなぎるようであった。私は此の身此のままに大なる仏の御懐に抱かれてあたたかにまもられゆるやかに揺られて我が魂は久遠の国に行き通うようであった。空を仰げば星は美しかった。その星の空をそのままに仏の御国は私をつつむようであった。私は西に向って静かに歩んで行った。しみ〳〵としたうれしさは私の魂の奥の奥に徹した。

静かな下宿の部屋にかえって落ちつくと、私は自然と念仏称名せずにはいられなかった。幼少の頃からその二十六歳の夏に至るまで一度も念仏称名したことがなく、むしろ念佛などということを軽蔑していた私が自然と念仏称名せずにいられなかったということは、不思議の中の不思議であった。私は合掌念仏しながらしみ〳〵とうれしい心にひたった。

かえりみれば私が親鸞聖人の世界にふれはじめたのは昨日今日のことではなかった。もとより儒教的な家庭に育ち、仏教に対する縁にとぼしかった私は、高等学校時代までは日蓮上人の名を知っても親鸞聖人の名は知らなかった。私がはじめて親鸞聖人の名を知ったのは大学の学生時代であった。それは私の親しき友の父君の一週忌の法筵に招かれたときであった。四五名集ってしめやかな話をした後、友は私に多田鼎師の「恩寵の宗教」という小冊子をあたえた。私はその小冊子を幾度繰りかえして味ったか。親鸞聖人がしんみりと親しまれるようになったのはそれからであった。殊にその中の「理想の聖人」という章が私の聖人に対する親しみを深くならしめた。聖人が一切の衆生を御同行と仰せられるその御心持が私にはしみ〳〵とうれしかった。努めよ励めよ勇気を振り起せよと私を鞭うつ古代の聖書も、もとより私にとっては有りがたい。併し自己が唯一筋に殊勝であるとおもっていた夢がさめかけて、自己をどこまでも裏切るものを自己の生命の中に発見してからの私は、鞭うつ聖者よりも共に苦しみ涙する深き心の人がなつかしくなった。聖人こそは正しくその人であるという

感じが私の心を深く動かしていた。

さりながらその感激には一高一底の波動があった。「恩寵の宗教」をよんで自分も亦恩寵の囹圄の人であるとおもってうれしかった感情はながくはつづかなかった。時々暗くなる胸の中をかえりみて自己を疑うこともあった。多田鼎師に直接疑問を持って行って、信仰とは仰信ともいい仰いで信ずることである。ふして自己の胸の詮議をすることではないという御さとしを受けたこともあった。併しなか〳〵に私の心は徹底しなかった。一方には日蓮主義といい法華経といい、又キリスト教にもなお心の傾動を持っていたのであった。

その私が二十六才の夏七月十一日にすべてをふりはらって唯一の絶対他力の信仰の世界に徹せしめられたのである。それは不思議というより外はない魂の上の事実であった。魂に哭いていた私が涙の中にほほえむ身となった。そして歓喜のおもい法悦の心が私の命のすべてをひたすようになった。

翌くる十二日には近角師の御導きで浅草本願寺において坂東本の教行信証を拝した。その後一週間ひきつづいて此の世は私のために新しく見えた。いうにいわれぬ法悦状態がつづいた。代々木の原になくひぐらしの声も此の世ならぬひびきにきこえた、心の貧しき者は幸なりという心持もはじめてわかるようであった。梁川の見神の実験にいう「帰依の酔心地」というのもかようなものではないかとおもわれた。父母に刃むかう心も融け、一切の人々に対する平和の情が動いて、世界はさながらに「讃仰の楽堂」のように感ぜられた。

此の法悦の底には唯一無二の信があった。「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」此の心持は同時に私の心持であった。（続く）

讃仏歌

伊藤　左千夫

人心あやぶきものと思ひ知り
　尊きみ名をせめて申すも
吾がこころ暗くしあればみ佛の
　光こほしみ止むときもなし
よき人の心とほれるみ教に
　わが世百年（ももとせ）楽しきを経め
天地のめぐみのままにあり経れば
　月日たのしく老を知らずも
天地の恵みのなごみ思ふとき
　足らはぬこころ毫末（けのすゑ）もなし

佛かねてしろしめして（一）

榊原　徳草

一

親鸞聖人は、御本典（教行信証）の「総序」に

「行に迷い信に惑い、心昏（くら）く識寡（さとりすくな）く、悪重く障多きもの、特（こと）に如来の発遣（はっけん）を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専ら斯の行に奉（つか）え、唯斯の信を崇（あが）めよ」

こういうように仰言っておいでになりますが、この頃、何かしら、フッと聖人の「総序」の言葉を思いだします。というのは、御本典の「総序」にこう聖人の記されていることには自信教人信―皆さんこうなんだよ、本当に如来の本願をお聞きなさいよと、こういうふうに仰言っておいでになるんだと今まで思っておりましたのです。その通りだと思っておりますが、この頃「行に迷い、信に惑い」ということ、これは聖人が自ら自分がたどった道をそのまま述べて、如来の行信二つに奉えまつった自らの気持を、あたかもひとり言を仰言るように述べておられるんではないかと、思いついたわけでございます。

ご開山、長いこと比叡山でご修業になられる。で、その間に「行に迷い信に惑い、心昏く識寡く、悪重く障多きもの」これはそのまま自分のことなんですね。御自身のたどられた道をずっと思い出して、そして「特に如来の発遣を仰ぎ」―特という字が書いてありますが、特という字を「こと」にと読ませます。私、これを字引でみましたら、この字はまた「ただ」と読めるんですね。ですから「こと」にという言葉は、ことさらただ、それひと筋にということなんですけれども、もう一つの意味では「ただ」ということですね。だから「ことに」ということは、そのまま「ただ」如来様の仰せをこうむって「この行に奉え」―自らが念仏を称えるんでなしに、如来様から下さる南無阿弥陀仏の大行をいただいて―「つかえ」という字は奉るという字が書いてある。「行に奉え、斯の信を崇めよ」如来様からの戴きものの信を崇めなさい、と。こういうようなお言葉が、一番トップに御本典にでてくる訳です。

で、『歎異抄』は皆さんご存じの通りに、十八章あります。第一章は「弥陀の誓願不思議に云々」。あれは『教行信証』全体をいうていらっしゃる様に「真宗概論」「教行信証概論」みたいな書き方がしてありますが、読んでいっても、目と頭だけがすうとついていくだけで、どうもあの中へ入っていけない。大体、お聖教でも何でも読むといえばその中に入らなきゃあ駄目なんですよ。私、〝座蒲団がどこかにあるからそこへ座りなさい〟とよく言うんですけれども、その中に坐る場所がないんですね。だから第一章は「ふん、そう」「ふん」と、頭でわかるだけで済んでしまうようなところが多いんです……。

私、花田先生に、第一章はどうもひっかかりがなくて、困るところですがと言うたら、あそこにひとところあるというんです。どこですかと言うたら「老少善悪の人をえらばれず」―老少、若い者も年寄りも、善人も悪人も、少しもへだてない、差別しないんだ、と。

まあキリスト教のようなおしえであれば、善人は天国へ悪人は地獄へとなってしまいますね。世間一般に若い者では駄目なんだ年寄りでなければとか、年寄りはもう駄目なんだ若者がいいとか、老少善悪を分けますが「老少善悪の人をえらばれず」という、ここのところが入るところだと。なる程、ここから入れるなあ、すると第一章もここから、ひとのことじゃない、私の事だなあ、と。今、私はもう七十五ですから、老の方ですね。それから善悪といったらもう悪の方ですね。「老」「悪」はえらばれないんだと、こういう仰せがここですっと受けとられていく。

そして、第一章もそういうように入らせて貰える座蒲団がそこにあった訳ですが、特にこの『歎異抄』は第二章―皆さんご存じの「おのおの十余ケ国の境を越えて云々」とずっと仰言ってこられて、そして、又ひとり言を仰言るように「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、と、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」と。「建仁辛酉（かのことり）の暦、雑行を棄てて本願に帰す」と。こういうように、私はよき人の仰せを、南無阿弥陀仏ひとつ―。ただ念仏して、ここでも「ただ念仏して」、「ただ」ということですね。そして、この念仏ということは、ひとつということです。「ただ」があって念仏があるんでなしに、「ただ」即念仏、念仏即「ただ」。言葉に書くと「ただ念仏」と、「ただ」の次に念仏がありますけれど、南無阿弥陀仏ということと、「ただ」ということ、これは重なっている、裏表のことでこれはもう一つなんですね。

二

仏教のお話というのは、お釈迦様がお悟りを開かれたところから始まる訳です。ところが、お釈迦様がお悟りを開かれた境地をそのまま説かれたところ、聴衆には「聾の如く唖の如く」で皆何を仰言っているのか、ちょっとも訳が判らんので、ぽやっとしておった。そしたら大迦葉尊者―一番年長でもとは持火外道であった大迦葉、二百五十人の弟子を連れて釈尊の弟子になられた大迦葉、その尊者ひとりがにこっと破顔微笑せられた。その通りですなと、にこっとされた。そしたらば、お釈迦様はただちに「我に正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。……大迦葉に付属す」とこう仰言ったとあります。

ですから、お釈迦様が仰言ったことをそうですと受けとる世界は「ただ」の世界ですね。ああであるからこうなんだということでなしに、それがそのまま、自分の身に通じてくる。耳から耳にぬけていくんでなしに、心のどん底に響いてくる。そういう受けとりかた、ここはもう言亡慮絶（ごんもうりょぜつ）と申しますか、言葉のいきつくところではない。お話するということはもう言葉の上なんであります。しかしそれは月を指差す指でありますから、何も月は見えんのであります。ここまで聞いたら、ここからその教えに従って月を仰ぐ。ここからが、不思議の世界、弥陀の誓願不思議の世界であります。「ただ」の世界であります。ここからが、我々を無にして、そして向う全体に移っていく感じ。禅宗の方ですと、百尺竿頭一歩を進める、と。百尺の竿の上へ登っていくと、もう一つ登っていけ、と。もうここで頂上なんです。そこからもう一つ登る、登ろうとしたら下へ落っこちる。落っこちたらどうもならんと思うとったら駄目なんです、もう一つ登れ!!これは師匠の仰せであるから、落ちて死んでもかまやせんと思ってそこから飛ぶと、本当に飛び上がって舞えるようになるんだ、と。

そういう世界が「ただ念仏して」というところですね。私の方に一切が、こうこうだからああなんだと、いわゆるはからいが全て用事がなくなって、如来の御はからいに任せる、ここのところが「ただ念仏して弥陀にたすけられなさいよ」という「よき人法然上人の仰せをこうむって信ずるほかに別の子細はない」のであるという、聖人が自分の胸を八文字に打ち開いて、この関東の疑いをもっている同行達に仰しゃったお言葉ですね。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」「ただ念仏」とは、南無阿弥陀仏ということであります。南無阿弥陀仏ということ以外にないわけであります。

三

我々はこう、一番困らしておるのは意識なんです。いろいろ、こうわかるということなんです。しかし、わかると

いうことがなかったらそれを超えることも出来ないわけですから、そういう意味ではわかることは必要なんです。けれどもそこにとどまっておればそれは計いであります。

『般若心経』の一番しまいに偈頌に曰く、と。「掲帝掲帝般羅掲帝般羅僧掲帝菩提僧わ詞」（ぎやてぎやてはらぎやて、はらそぎやてぼだいそわか）というところへくるですね。これはお釈迦様の仰言った言葉をそのまま写しているんですね。これがこの『般若心経』の一番大事なところだと言われます。今までいろいろ「五蘊仮和合」であるとか、地・水・火・風で出来ているとか、ずうと細かく一切を否定してきたあげくに、これを総くるめで一括して頌にするとこうなんだ、というところを原語のままであらわされたもので、これを翻訳しますと「着いた着いた、彼の岸に着いた、ああ、よかったな」という事だそうです。彼岸とは、ご信心の世界、おさとりの世界。こちらの方で迷うておる我々がご信仰の世界へ入った。それがそのまま、お釈迦様の言葉で翻訳せずに、「掲帝掲帝云々」とこう言われた。「ただ念仏して」、というのもこれなんであります。ご師匠法然上人が「ただ念仏して」、南無阿弥陀仏、こう南無阿弥陀仏で心のおさまりがついたんである。それをそのまま親鸞聖人も尋ね尋ね「行に迷い信に惑い、心昏く識寡く、悪重く障多きもの」のご自分のことを打ち出されました。するとそれをそのまま、法然上人も「私も二十年前にそうであったんだよ、同じだったんだよ」とお答えになり、そのご師匠の仰言るそのままのお言葉をいただいて「親鸞においてはただ念仏して云々」でありますね。ここでは、南無阿弥陀仏という意味はどういうことか、そしたらどうなるんですかと、そういう余裕はないんです。

お釈迦様の有名なお譬えにありますね。毒矢が刺さったとき、その毒はどういう毒であるか、誰が射た矢であるか、そういうことを詮索しているのは、それは未だ毒矢を毒矢と知らんからである。即座に医師を呼んで手当をしなければ駄目である、と。ここですね。

ですから、我々がお念仏を本当に聞かせていただく場合には、開山聖人が仰言るように「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住みかぞかし」こういうものに心の証（あかし）が欲しい、と。人間に生まれて、いつ死ぬか判らない自分が、本当に人間として明るみを堂々と生きる生き方を、ここのところで私は知らせていただいたんです、と。そういう結着がつくところ、毒矢を抜くところそこんところが南無阿弥陀仏でありますね。

四

元来我々は、いつでも、意識の世界に九分九厘生きております。我々はいつでも理解する、判る、納得するということばかりの生活であります。そこから是非善悪が出て来る。俺がいいあいつが悪いとか、あいつがいい俺が悪いとかいうような二つの世界、対立争闘の世界、はからいの世界、こういうもので生きとるんでありますが、しかしそういうもの出すもとがある訳ですね。二つに分れるもとがある訳です。鈴木大拙先生がよく仰言いましたが、西洋の考えは二から始まる。キリスト教でも、神がおられて、第一番に一切を創られる。そして人間を神様に似せて創られたですから創った神様と創られた一切、及び人間がある訳ですね。創るものと創られるものと二つから始まってくる。そういう世界がキリスト教の世界であります。

で、我々の意識の世界でも、いつでも二つの世界から始まる。しかし、その二つの世界のもう一つ出て来る奥がある。木が生えておりますが、我々見る世界は―青々としておるあの木が、そこにちょいと置いてあるのでなしに、根っこが下についている訳です。これが判らんのです。見えているこの世界は二つの世界、ああ太っている木だなあ、青々としているなあという、見えている世界は、我々の意識の上に反映してくる世界です。それを生き生きとそうさせているのは、我々の意識には触れてこない。その下に隠れておる根っこが、そういうものを打ち出して栄えさせている訳でありますから―。この一番中にある世界、一つの世界、意識の判る判らん、そうだそうだでない、そういうような世界を出しておる元になる世界。ここのところを、いうてみたら南無阿弥陀仏の世界なんです。これはもう、理論で割り切れるとか、なんぼほじくっても、そこのところには、そういうものは無い訳であります。未完

（高倉会館、昭和五〇年八月二十四日、日曜講話）

読書のしおり

「法華経を余人の読み候は、口ばかり、言ばかりは、読めども心はよまず、心は読めども身に読まず」（日連上人）

口や言による読経、心による読経（心読）、身による読経（身読）の三者を区別して、法華経の真精神を体得することを説いている。

プラトンの著名な研究家たるナトルプは「自分は何回も繰返しプラトンを読んだが、その度毎に、プラトンの新なる意味が発見される。それは読まれるプラトンが深いためにそうであるのか、或は読む私自身が深められて行くためにそうなるのかわからない」と述べている。

念仏詩抄

木付無相

クセモノ

伊勢の信道曰く
〃間に合いそうな心が
おこったら
そのままスグに
捨ててしまえ―〃

間に合いそうな
心クセモノ
その心にだまされて
ミダがたのめぬ
わたしの心は
間に合わぬもの
どんな心も
間に合わぬもの

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ありのままが

等覚寺師仰せに
〃鳥は
黒いで黒い
鷺は
白いで白い――
堕ちるは堕ちる
助かるは助かる
機と法の
ありのままが
あらわるるなり〃

黒いで黒い
白いで白い
機は機
法は法の
ありのままが
感ぜらるるなり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ

明信寺師仰せに
〃仰せの如く
ならんとするも
金輪（こんりん）
なれぬ――
ただ
仰せのままを
聞くばかり――〃

〃仰せの如く
ならうとしても
どれだけしても
なれはせぬ
なられん自分と
知らせてもろうて
ただ
仰せのままと
聞くばかり……〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それから前も

一蓮院師お尋ねして
〃聞く気のなき者を
聞く場に引き出すが
教え手の役でございますか〃
香樹院師仰せに
〃そうじや
それから先きへは
凡夫の力ではゆかぬ―〃

そこまでさえも
凡夫の力ではゆかぬ――
それから先きも
それから前も
ただただ如来さまの
オハタラキ―

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

死なねばならぬ

智道師仰せに
〃死ぬる気に
なれぬぐるみに
死なねばならぬ
身じやということ
忘るるなよとの
善知識の御教化―〃

わたしもか
いや
わたしが―
死ぬる気に
なれぬぐるみに
死なねばならぬ身は
このわたしが――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

――牧水の歌がしきりに思い出される此頃です――

あやうかるいのちを持ちておのもおのも
生きこらへたり逢はざらめやも

寂しさにおのおの耐へて在り経つついつか
終りとならむとすらむ

如来は最上の知己

花田正夫

ある西洋の社会心理学者が
「十九世紀の問題は神は死んだということであるが、二十世紀の問題は人間が死んだということである。来る世紀には人間がロボットになり、機械化され。商品化される危険性がある」
と警告している。機械文明は発達したけれど、人間は疎外され、都会の孤独、親子の断絶となってうるおいのない社会が多くなった。

眞の友とは

こうした社会だからなおのこと良い友人。真の知己が欲しい。昔から「旅は道連れ、世は情け」とか「朋(とも)あり遠方より来る、また楽しからずや」というが、たしかに良友に恵まれると沙漠の世界も明るく楽しくなる。
さて友にも種々ある、学友、同郷、同輩、趣味の友などであるが、真実の友とは互に心を知り合って、苦楽を共に分かち合い、同心一体で、親の膝元（ひざもと）で兄弟が睦びあうような心のかよう友、時に意見の相違はあっても

それにさまたげられない「君は君、我は我なり、されど仲良き」と武者小路さんが云うような友情を持つ人である。
しかし人にこうしたことを求める前に、自分自身が真の友情に値いする人間であるかどうかを省みねばならぬ。自分は友をよく理解出来ているか、利害得失で離合集散する以上のまこと心があるか否かを省みる時、人はいざ知らず残念ながら私にはその資格がない。そこに自業自得の道理で、荒野の一人旅がそのさだめである。
こうした身に、私が求めるよりさきに、先方からさしのべられた大きな温かい手があった！三界に家なき身。独生独死、独去独来の身をかねてよく知りつくされて、老少善悪をえらばれず、男女貴賤をへだてられず、すべてをよく理解された上から、どうあろうとも捨てはせぬぞ、何処に何をしていようとも呆れはせぬぞと寄り添うて下さる方がましました、「士は己れを知る人のために死す」と云うが、己を知って下さる人、こうした友はただ一人あれば十分である、その最上の良友であり、真実の知己が佛陀でま

しますのである。

思わず合掌

それをそれと気づき得なかったのは、私自身が五分五分根性しかなく、自分が悪いのによくして下さる方がまさかあろうとは夢にも思えなかったのである。蟹は自分の甲羅（こうら）に相応した穴を堀るように、絶対の佛心を相対的存在としか思えなかったのである。

幸に親鸞聖人の教えに導かれて、硬い石もたえずおちる水滴でうがたれるように、人生百般にわたって、くりかえしまきかえし、たすかるべからずる者の上にそそがれる仏心のおまことを、聖人は身をもってあかして下さったお蔭で、疑い心をとかして下さったのである。

何というよろこびであろうか。永年迷いに迷った子が、思いもかけず親にめぐり合えたよろこびにたとえられよう。そこは聖人をはじめよき人々とご一緒の明るくにぎやかな世界であった。それまではことごとに疑心暗鬼で恐れおののいたことも、幽霊の正体が枯れ尾花と知れるように、自然にすべて解消され、内外のさわりにさまたげられないやすらかでたしかな心のよるべを恵まれたのである。あまりの嬉しさに父の墓前に走せて、お礼をせずにいられなかったのもその時であった。そこに立って省みるとそれまでの私の全生涯は、順逆の如何を問わず、そこに到達するためになくてはならぬ尊い人生であったと、思わず合掌せずにいられなかった。

それからは、一人ぽっちの旅でなく、いつも佛光に照護された新生活がひらけた。かといって私は依然として昔のままの煩悩具足の身であって、私の持ちまえ通りの歩みしが出来ない。わんぱくざかりの子供と同様で、見るもの、聞くものに心ひかれて、その足どりはおぼつかなく、あぶなかしいものであるが、たしかな、たのみ力になって下さるお方にまもられて、ひきもどされ、ひきもどされては、摂取して捨てたまわぬめぐみをこうむっている。

たのまるるただ念仏のわれにあり
さるべき業はさもあらばあれ

とは、恩師、池山栄吉先生の還暦を迎えられた正月に、御自辺、多事多難の中にあって、佛力の無碍光を仰がれては、身にもつ業はよかれあしかれそのままにうけて超えられた信味である。

こころ迷いて

また近角常観先生のご晩年、中風で半身不随、御長男の蘆山での戦死、宗教の自由を叫ばれて生涯反対し続けられ明治三十年頃からまもれたことも、非常時の名のもとに宗教法案の強行実施等々、御不如意の中にあられて

跡もどりあともどりしてたどるらん

甲斐なきことにこころ迷いて

の一首を愛唱され、歎異抄九章を引用されながら、この摂取の御手を随喜していられた。ああ、この御手以外に、煩悩の身、火宅の世に、生のよるべ死の帰するところがどこにあるであろうか。

（昭・五十一年二月二十九日・中日新聞）

×××× ×××× ××××

ともしび

聚墨記

我は黒白をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり。

（法然上人全集）

はじめて法然上人のこの文を読んだ時、あまりに誇張されているのではないかと疑ったが、世間で古稀と呼ばれる年齢になった今日、種々のことにふれて、段々とこのお言葉通りであるとうなづきはじめた。

私共がもし、黒を黒、白を白と、所謂禅家のよく云う、柳は緑、花は紅と正しく知ることが出来れば、多々ますます弁じ得て、人からだまされたり、やりそこなうこともなく事を処すことも出来よう。古来の高僧達が心血をそそいで生活を正しくし、心をしずかにし、澄みきった智慧のひらけるように専心せられたのもこのことである。

しかし、凡俗の私共は、身びいきな心に防げられて、自分に都合の悪いことは心で拒否している。だから共に不完全な人間同志であるのに、我よし彼わろしと思い、老いてもそれを自覚出来ず、何時か何処かに幸せがあるだろうとの煩悩の幻影に惑わされて、次々と幻滅の苦に遭うては愚痴をこぼし、腹を立て、不平不満な生活をくりかえす。

こうした泥沼から足が洗えぬ身と事毎に知らされて、法然上人の御言葉もうなづかされ、西岸上の人、彌陀仏の切々とした招換の声のそこにあると仰ぎ、そこに唯一のともしびを頂いている。

（昭和四十八年十一月十八日）

ひとつことを聞いて、いつも珍しくはじめたるように
信の上にはあるべきなり

（蓮如上人御一代聞書）

時も移り、人も変わる。そこで人々は新奇なものを追い求めて時代おくれになるまいとするが、そのまんまいつしか古くなってしまう。

ずうと前のことであるが、外国電通の局に招かれた時、ここの職員は二、三ヵ国の言葉に通じていて、世界の先端を行く人々だから、古い話でなく斬新な講話をと局長さん

に頼まれた。

そこで、本当に新しいとはどういうことであろうか。世間に流行する服装や思潮は、やがて陳腐してしまうが、毎日昇る旭日は、いつ仰いでも心が清々しく洗われる、そこにいつも古くならない新鮮さがある。また名画を鑑定するには、毎日それをながめていると、偽物はすぐ飽きがくるけれど、真物は次第にそのよさに見惚れてくると或人から聞かされた。古くして日々に新たなもの、それが真実に斬新なものと思うと話し合った。

さて、古くしてつねに新しいものに仏陀の金言、実語がある。それは時をこえ、所をこえて万人がうなづき、見聞者の心を打って何時も珍しく初事としてこころよくひびくこれは絶対な仏のおまことが、言葉とあらわれたものだから、煩悩によごれきった私どもも、これにふれると、とかく老化し、硬化しがちな心をやわらげ、若返らされて、永遠の心のあけぼのを迎え、汲めば汲むほどこんこんと湧き出るいずみの味いを知らされ求道の永遠の旅がはじまる。

（昭和五十一年三月十四日）

わが彌陀は名をもってものを摂し給う。耳に聞き心に誦するに無辺の聖徳、識心に乱入し永く仏種となる。

（彌陀経義疏）

浄土では言葉は無用、互に自在に道交し、地獄では言葉が不通、問答無用で暴力が支配する。ひとり人間には言葉が必要、これで古今東西の人々と心がかようと聞く。

さて、彌陀仏は人間を導くために南無阿彌陀仏と言葉とあらわれ、この語をしつかりたもてと手を執って下さるのである。私どもはこのことを軽く考えているけれども、相対差別の身に絶対平等の光りは、この言葉となってとどけられ、この言葉がなくては光明界への道は永遠に塞ざされる。それは丁度、太陽には人が到着出来ないが、太陽からの光線は地上にとどいて、明るさと温かさを与えられるにたとえられよう。

これについて、先年、岡山の愛生園の篤信者から会いたいから来てほしいと切望されたけれど、私も病身で旅が許されない。会いたいが会えぬ。会えぬが会いたいというジレンマの渦中におちた時、フト気づき、言葉のあること、文字が出来ていることのありがたさを今更のようにありがたく思った。

本当に会うとは単にすがたかたちだけではない、大切なのは心と心とのとけ合いである、道交である。してみれば文字の中に私の心のありつたけをこめてお届け出来る道が与えられていたと思わず文字を三拝した。

このとき、彌陀仏の、必ず助けとげずばやまじとのお誓いのこもったお呼びかけ、南無阿彌陀仏と私どもを拝み続けて下さることの深い思召しの片鱗をあらためて仰いだ。

（昭和五十一年・五月二日）

彌陀大悲の誓願を深く信ぜん人はみな、寝てもさめてもへだてなく南無阿彌陀仏を称うべし

（正像末　和讃）

近角常観先生がまだお若い頃、郷里のご母堂から手織りの白衣が届いた。その頃先生は欧州遊学から帰られて、日本各地に法縁をあたためていられたが、その白衣をうけとられた時、有難いけれど現在では織機も発達していくらでも容易に手に入れられるのにと、何かおろかしい親切と思われた。それでも切角の品だからと行李に入れて旅されていた夏、汗かきの先生は白衣を度々洗濯せねばならぬので、機械織りはすぐ駄目になった。ところが手織りのそれは、いつまでも丈夫であった。

そこではじめて「自分が人並はずれて乱暴で汗かきなことをよく知った母が丁寧に糸を紡いでしっかりと織りあげて下さったのか気づいて、思わず白衣を押しいただいた。それまでは物だけを貰って、母の親切に気づかなかった。お念佛を頂くにもここのところが大切である」と痛感されて、その後はこの手織りの白衣の話を生涯語り続けられたのであった。

お念佛とは、佛が、この世は冷たく寒いところだから、これを着よと、わざわざこしらえて下さった真綿入りの着物である。また、夜道は暗く迷ったりつまずいたりしてあぶないからこれを持てと用意して手渡して下さったともしびである。

それなのに、親心子知らずで、着物を箪笥にしまいこんでいて、人間は冷たいと寒さにふるえていたり、世間は闇いと、夜道に提灯を渡されているのに、それに点火もせずに、到るところで惑い、つまずきをくりかえしているのが私の現状である。

この故にこそ聖人は「ねてもさめてもへだてなく称名念仏はげむべし！」と念じ続けて下さるのである。

（昭和五十一年六月初旬）

あとがき

梅雨に入りました。公害の多い街も草も木も青々として自然のもつ力に心うたれることです。

五月雨のある夜ひそかに窓の月

誰やらの句がフト心に浮かび、貪瞋煩悩の雲間にもれる念仏の妙味をあらためて讃仰しております。池山先生が或時「名誉や財宝や権力、更に美人を添えて、これと念佛と交換しようと云われても、一寸かえられないね」と笑い話をされたことがありました。絶対価値の真味を軽く語られたことでした。

○

近角先生は大信によって思想解決が自然に出来ることを教えて下さいました。大正六年と云えば第一次大戦後の思想の混乱、経済の変動、米騒動等々のきびしい頃でしたが先生はこれにおこたえ下さったお講話でした。

福島先生の「慈光のあと」は信界建現誌に掲げられたもので、先生の信眼の開発された尊い記録であります。

「佛かねてしろしめして」の榊原さんの原稿は、京都高倉会館で日曜講話であります。会館発行の「ともしび」誌から転載させて貰いました。狂人が病識がありませんように凡夫の自覚も出来ず、否凡夫だからこそ凡夫の自覚が出来ぬ身，その煩悩無尽の故に生死海無辺なことを佛かねてしろしめされてのさしのべられる大悲の御手をお述べ下さいました。

木村さんは十日余りも名古屋、東京、更に京都、大阪と旅をされ、血圧の障りもなく無事に帰園された由でホッとしております。カバンを肩に、両手にバッグをさげて歩まれる後姿に、俳人山頭火の面影が二重写しに見えました。

すてきれぬ荷物の重さまえうしろ

の句をも連想しました。

私の原稿は、中部日本新聞に出しましたものをのせました。又「ともしび」も同様であります。

○

横浜市緑区美しが丘、二―四三―二。の長畑須賀男さんが、両手両足を病で切りおとした「ダルマ娘」と呼ばれた故、中村久子女史著「**私の越して来た道**」の本を、御希望の方に無料進呈される由であります。直接に長畑さんに御申込み下さい。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
市バス、新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目左入る。
地下鉄、新瑞橋下車。
近鉄呼続下車。
又はもと笠寺下車、市バス乗りつき。

○ 毎月二十四日。午前午后。
昭和区小桜町、教西寺法話会。
市バス、御器所通り下軍、又は北山下軍。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十八巻　第七号　昭和五十一年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可